

市民の健康支援ニーズに対応した保健師活動の改善・充実方法に関する研究

大川眞智子 森仁実 菱田一恵 北山三津子 会田敬志 杉野緑 岩村龍子 松下光子 坪内美奈
両羽美穂子 大井靖子 平山朝子（大学） 堀幼子 横山郁代 柴田恵津子 小山美香 松本真理
佐藤沙夜香（羽島市保健センター） 橋本詩子 国井真美子（羽島市高齢福祉課）

I はじめに

本研究は、平成12年度からの継続研究である。今年度は、昨年度より引き続き、健康日本21地方計画策定（以下、地方計画とする）への参画の機会を得た。

羽島市は、2005年度に岐阜市他と合併する方向で動いており、既に合併予定市町の保健師間で、合併後の保健事業の運営方法や保健師活動のありように関する審議が始められている。今回、地方計画策定にかかわり、合併後の将来構想が不透明なまま地方計画を策定することの難しさを実感した。

そこで、今年度の地方計画策定のかかわりを通して、市民の健康支援ニーズに対応する保健師活動の改善・充実方法を検討したいと考える。

II 地方計画（案）の概要

作成した地方計画は、名称を「元気はしま21」（仮称）とし、基本目標を「みんなでつくろう健康なまち」とした。基本方針として、一次予防を重視し、①市民の主体的な健康づくりの取り組み、②個人の取り組みを支える地域活動、③市民の健康づくりを支える環境づくり、以上の充実強化を目指している。

計画期間は、2004～2010年度の7年間である。但し、2005年度に岐阜市等と合併した場合は、今回作成した計画を羽島地域の特性を反映させたものとして新計画に活かすことを考えている。

III 地方計画策定における大学教員の参画

現在、本研究メンバーの教員が、地方計画策定委員会に2名、担当者会議に3名参画している。また、担当者会議に参画している教員は、担当者会議ワーキングのメンバーを兼ねている。なお、担当者会議のワーキングメンバーは、保健センター長、予防係長、保健師2名、調査会社コンサルタント1名、大学教員3名で構成されている。

担当者会議のワーキングでは、担当保健師が作成した地方計画（案）を基に、担当者会議で検討すべきことなどを打ち合わせ、担当者会議に向けた準備を行った。

IV 地方計画策定における市看護職と大学教員のかかわり

1. 会議・ワーキングでのかかわり

地方計画策定にあたり、「計画のための計画」ではなく、保健師活動の充実に役立つ、現状を踏まえた計画を立案したいと考えた。そこで、目標値や具体的方策を検討する際に、市民健康意識調査の結果や保健事業の実績とのつながりを確認するようにした。

なお、今年度は、地方計画策定委員会が3回、担当者会議が3回、担当者会議ワーキングが3回実施された。

2. 住民との話し合いを意図したかかわり

1) 健康づくり推進員研修会の企画

地方計画策定に活用するために、健康づくりに関する住民の生の声を聞く機会を持ちたいと考え、健康づくり推進員研修会（以下、研修会）の場を活用することとした。そこで、研修会のプログラム内容を、担当保健師と一緒に企画した。なお、当日のプログラムは、表1に示したとおりである。

表1 健康づくり推進員研修会プログラム

日時：平成15年5月13日（10：00～11：30）

場所：羽島市保健センター研修室

参加者：健康づくり推進員70名

【プログラム内容】

1. 説明（大学）

『健康日本21の基本的な考え方』

2. 報告（保健師）

『羽島の健康・生活習慣の実態』

- ・悪性新生物による死亡：H3年99、H13年158名
- ・がん検診受診率：H13年 胃5.1%、肺4.9%
- ・県平均に比べて、男性に朝食欠食者が多く、主食・主菜・副菜がそろった食事を3食とる人も少ない

3. グループ・ディスカッション

- ・説明・報告を聞いての感想、保健事業に対する思い、健康に気をつけていることなど

4. 全体発表

- ・グループ代表の住民が話し合い内容を全体発表し、全員が意見を共有する

5. アンケート調査の実施・回収

*スタッフ：予防係長、保健師2名、大学教員2名
本学4年生7名

研修会のプログラムを企画するにあたって主に意図したことは、①住民との話し合いやアンケート調査を通して得られた、住民の健康づくりに関する意欲や保健事業に対する気持ち・考えを地方計画づくりに活用し、保健事業の改善に結びつける、②健康日本21に関する羽島市の取り組みをPRして、地域社会全体で健康づくりに取り組むことの必要性について住民の理解を深める、以上の2点であった。

2) 住民の健康づくりに関する意欲や保健事業に対する思い

(1) グループ・ディスカッション

保健師・大学教員・本学学生が進行役として各グループ(約10名)に入って、意見交換を促した。その結果、がん検診の受けにくさなど具体的な話を聞くことができた(表2)。

表2 話し合い内容の具体例

- ・子宮がん検診を集団で年数回実施して欲しい。医療機関は混んでいて、妊婦さんばかりで恥ずかしい。
- ・がん検診は予約が必要なので受けにくい。都合のよいときに自由に受けられるなら受けやすい。
- ・がん検診に近所で誘い合っ出て出かけている。車を運転しないご婦人は助かっている。
- ・朝食欠食者が多くて驚いた(グループ全員)。
- ・食生活の大切さを乳幼児期から親に教えて欲しい。

(2) アンケート調査

研修会の最後にアンケート調査を実施し、「がん検診の受診率、未受診理由、どのようにしたら住民ががん検診を受診しようと思うか、健康について気をつけていること、研修会の感想」などを調べた。その結果、表3に示したように、健康づくりについて意欲的な人がいることがわかった。

表3-1 アンケート調査の結果

- 回答者：推進員70名(30代6名, 40代16名, 50代30名, 60代16名, 70代2名)
- 健康状態：よい(43.5%), 少し不安(52.2%)
- がん検診受診率(過去一年間)：13.0%
- がん検診未受診理由(複数回答)：自覚症状が無い(23名), 忙しい(16名) 検診結果が怖い(4名)
- どのようにしたら住民が検診を受けようと思うか：誘い合う, 回覧では駄目なので少人数に説明して周知する, 検診日・時間を限定しないなど
- 健康づくりとして努力していること(50名回答)：十分な睡眠(11名), ウォーキング(6名), バランスよい食事(5名), 無理なく動く(5名), ストレスをためない(4名)など

表3-2 アンケート調査の結果

■ 研修会の感想

- ・グループでの話し合いは、参考になる意見が聞けて勉強になった。いろいろ話し合えてよかった。
- ・4世代の健康的な家族の話聞き参考になった。
- ・健康管理について見直すことができた。
- ・食事の重要性を再認識した。
- ・健康日本21が目指す今後の活動に目を向けていきたい。
- ・今後、研修会の回数が増えても良い。

3) 住民の声の地方計画づくりへの活用

研修会后、把握した住民の意見や現状を基に、今後の健康づくりや推進員活動のあり方について検討する機会をもった。しかし、合併後に保健事業がどのように運営されるか不透明であることに加え、合併協議会の中で実際に推進員活動の存続が困難になる動きがあったことから、具体的な方策を検討するには至らなかった。

V. 今回の報告会で討議したこと

羽島市に限らず合併を控えた保健師は、合併後の保健事業の運営や保健師活動の方向性を具体的に描けないジレンマを抱える一方で、今まで築いてきた大事な活動を合併後もどう継続させるか、ということが大きな課題であると思われる。

今回は、合併後の保健師活動を充実・発展させるために、「合併に関する各自治体の準備状況。大学が支援できることは何か。」について情報交換を行った。なお、分科会2の4テーマ中、3テーマが合併を控えた自治体保健師との共同研究であり、合併に関わる課題は共通していると思われるので、3テーマ合同で討議を行った。

合併を数日後に控えた方および合併に向けて準備中の方など立場は様々であったが、合併にまつわる現状、今後の課題などが活発に意見交換された。

1. 各自治体の現状・課題など

1) A村

- ・平成16年3月、7町村で対等合併の予定。
- ・合併に向けた保健師間のワーキングにおいて、保健師が大切にしたいと考えている活動を合併後も同様に継続させる方向で話し合っている。保健師は、合併後も住民の声やニーズに応じた保健師活動を継続・充実させたいという思いを持っており、団結が強い。今年度は、ワーキングを43回実施した。
- ・住民を把握できなくなる不安はある。
- ・福祉や学校との連携には、町村格差があるので、今後の持ち越し課題として考えたい。

- ・合併後も、各地域の特性を活かして、住民主体の活動を支えることに力を入れたい。大事にしたい活動を保健師だけの力で継続させるのではなく、関係者や住民の意識を高めて、一緒に協働していくことが大切である。

2) B 町

- ・2市町で合併の予定（市に吸収合併）。
- ・予算は少なくなり、行政として、どのような方向性に進むのか、まだわからない。
- ・今まで培ってきた保健活動に対する理念や把握してきた住民の思いを、合併後も活かしたい。合併予定の保健師間での理念のすり合わせは、まだ行っていない。

⇒討議参加者の中に合併予定の市保健師がいたことから、「今後、B町保健師が大事にしたいと思っている活動を聞いて、思いを共有したい」という意見を市の保健師から聞くことができ、この場で互いの思いを確認することができた。

3) C 町

- ・平成17年、7市町村で合併の予定（市に吸収合併）。
- ・管理職レベルの話し合いは既に始まっている。保健師間のワーキングは今後開催予定。
- ・保健師活動に対するそれぞれの思いを話し合っ、今後の計画づくりに活かしたい。

4) D 市

- ・3市町村で合併の予定（市に吸収合併）。
- ・市のサービスに合わせると、今まで可能だったサービスを受けられない住民がでてくる。

5) E 市

- ・平成17年、6市町で対等合併の予定。
- ・分科会形式で、保健師間のワーキングは始まっている。ワーキングは、事業のすりあわせから始まった。
- ・合併予定の市町間で人口格差が大きく、人口の多い自治体主導になりやすい。保健師として大切にしたい活動であると思っ、財政的に無理とみなされ、活動を継続できるよう説得することが難しい。
- ・ワーキングにおいて、事業をすり合わせるだけでなく、保健師として何を大事にしたいかを話し合うことが必要である、という動きが出てきた。互いに保健師として大事にしたい理念や活動を理解しあって、各地域の特性に応じた活動が継続できるよう検討していきたい。

2. 質疑応答における意見

1) 県保健所の支援状況

- ・県保健所が、合併に関わる保健師のワーキングに参加している事例は確認できなかった。
- ・自治体保健師の側から、県保健所に支援して欲しいことは何かを伝える必要がある。

2) 大学からの支援として希望すること

- ・現在取り組んでいる共同研究の成果を、保健師と一緒に住民へ返して欲しい。住民に直接アプローチすることで、保健師が大学と共同研究している姿を住民に理解してもらおうと同時に、首長など行政幹部にも活動の意義を認識してもらいたいと考えている。

VI. 討議を終えて考えたこと

今回の討議では、合併に関する各自治体保健師の準備状況や今後の課題を参加者が共有することができた。合併予定の自治体保健師間では、お互いに本音で語ることが難しい様子が伺われたので、今回のような合併にまつわる現状や課題を話し合い、励ましあう機会がもてて良かったと実感している。

また、保健師間のワーキングで保健事業の方法論を検討するだけでなく、まずは、保健師が合併後も大事にしたいと思っている活動や活動理念など、保健師活動に対する思いや本質を互いに理解しあうことが大事であるという気付きを、参加者は得ることができたと思われる。

合併後の保健師活動が、今までの活動と別物として切り離されて計画されるのではなく、今まで保健師が築き上げてきた住民との信頼関係や保健師が把握してきた住民の声やニーズを基盤にして、更に充実・発展していくことが重要であると考え。そのためには、合併前に、今までの保健師活動や保健事業の実績・成果・保健師の意図、活動に対する住民の反応やニーズを整理して、合併後の保健師活動を充実させる方向で話し合う必要があると考える。そこで、大学としては、保健師が今までの活動を振り返り、事業評価をする際に、客観的な立場から大学が支援できることがあるのではないかと考える。今後とも引き続き、大学として支援できることは何かを検討していきたい。